滑稽奇談

酒取物語

上

へ13
3131
1

へ13
3131 1-3

[illegible]

雷[illegible]

季吟老人一斗にて百篇[illegible] 我[illegible]一合で百首を[illegible] [illegible]の[illegible]日本の[illegible] [illegible]百首[illegible]中[illegible]一首[illegible]撰[illegible] [illegible]十五首[illegible]の[illegible]仲間[illegible]主人[illegible]筆[illegible] 甚味[illegible]

魚宗 雲岩 中浦伯盛書

春は櫻の花の雨。秋は紅葉の村時雨。詩歌を[illegible] 茶の話の種にもなさで[illegible] 晒落を書[illegible]出[illegible] 言ひ出す竹取ならぬ[illegible]翁が[illegible]安[illegible]姫君美さ 艶さ男なる人でも魂も。[illegible]選集[illegible]五人連 思[illegible]戀人に。[illegible]理ある事を頼ましも[illegible] ことはりて[illegible]様方の慰[illegible]筆を[illegible] 文久紀元と[illegible]年。眼[illegible]卯の[illegible]耳[illegible]郭公の[illegible]を 聞[illegible]隅田の草庵[illegible]筆を採[illegible]江戸[illegible]の野[illegible]

平亭銀雞述

銀 雞

へ13
3131
1
特

近藤陸舟
中浦雪岸
三木貞斎
片石喜石
服部随菴
中西梅三
一雷山人
新井利民
廣瀬澹斎
宇佐美梅窩
分部雪斎
六木林英斎
松井山栽山
関根孔年

一心斎
青木龍峯
高林二峰
沖冠翠
吉田南陽
吉田南海
福岡年谷
滝山霞崖
松島雲鴻
荒川美良
石川雪明
平井東堂

随庵「トキニ先生此度のお作の滑稽竹取物語ハ。どうもいゝ出工夫よ。
滑稽心子せまります子 銀雞「さうさつわりでございますが。
どうで有なさう 文池「イヤ大きにやサ全躰コリヤア大本で
できて居るじやア有やせんか 暢遷「さやうサ大本ハ私が直して
板下を書ましたが大本でハ板元のうけがよく。小本にしてくれ
ろといふまで。急に書あらためましたが。小本の板下ハ
蔵前辺の人が書たといふまで有ますが。手尓葉ちがひ
仮名ちがひを校正するので困りましたといふ 銀雞先生

のおかしでございましく 三柳「コレくしも其おはなしをきく
ましたが。窓子板下に誤りを書ねバおそれいります。暢
遷先生ハさすが和学先生の子息だけあつて。字画
仮名遣ハ正しいものサ。板下ハいくら能書でも誤字仮名違
をかかれてハ実に困ります 風香「さうでござりやす。それハ曲
亭が。備書家の為に仮名手尓遠葉を誤るといふをさ
聞いておられましたが。実にそのとほりでございます 梅窩「この作者
ハ別して仮名てにをはハ文字のちがひが有てハならしく作

でござへますへ。溪斎「さやうサ元来あるげさて居ます。そのうち
ふ文字のあやまりが有て作ニありません。雪岸「この画ハいつくいハ
亀戸の國綱がかいたのでござります。小岸子なりの付急
子繪をかさくせねバなりませぬ故。芳春子だのんでかいたので
でござりますから。それで國綱の画を縮めたので
ござりません。東堂「いかさ成やうまでござりません。亀戸中でも
八景ふ會あとらふ。それしが有ますろけ。イヤ今も松山先生
の御めがね通り。寫ふかなちがひハ書たくないものでござい

ますへ。瀬戸物町のまんべんといふ鰹節屋の家根にある
鑑板子。からかしとありますを。京都の人が見まして。私
江戸なぞでハ此様なかなちがひ書さらねバいゝものをと
笑ひましたと話をきゝましたが。あるほど「それを書べきなれバ」
を書てハならぬやうなもの。喜石「いかさま私もそうおもひますが書た
宵ますへ。イヤ此間堺町を通てみましたが。どちらやら付の
鑑板子。竜紋風でちどり子と書て宵ましく
も今おもふしの「をの字でなければならぬものを

踊のかずハをでなけれバなりません。なぜ丸さ
をどり踊躍どちらでもをでなけれバならぬ筈ぐ連
そして世間一統ニどぢやうと書ますが。あれハどぢやうの方
がようでござりません。本草啓蒙巻の四十魚部ニ泥鰌
ドヂヤウと假名がつけて有ます 雪齊「なるほどさやうでござ
いますそして又世間の人の心得ちがひが有ますが。鰍の
字を鯨のことゝ思て居りますが。綱目ニハまさしく泥鰌
のことでござりません。既ニ註ニ鰻鱺ニ似て丈短しと

有ません。まづ字林玉篇なども。却て鰍ドヂヤウと有て
クヂラとハござりません 梅谷「イヤなるほどどぢやうの話ニ実がいり
ましたが。さりいとおもしろうござります。天明七年の著述で蘐野
精魚庵が料理要草の三巻目ニ。どぢやうを升で量て
賣買するハ。安永の末ゟ天明のはじめ頃より始りしを
みて。夫なるぶ皆籠へ入れ水をきり目方ニかけてあきなひ
一物なりと。記して有ますが。秋齋間話の四巻目ニ。ど
ぢやうを買ニ。左の手ニ塩を掴てそちらまれバ。どぢやう

ちゐん升へいれてもねだんがあがりといふ事がありますがこの
文をごらんなされば。安永天明よりまぎれ前より升まで
なかなかとごぞんじません。秋齋閑話ハ宝暦三年の板でござりま
すから。廿七八年も前でございます。竜峯「さやうでございます
かナ。とかくそのゆゑ間違が有やうがありません。平秩東作が
鵺談義ヲ鯰と土長がつかみ合より遂ヲ左右ヲわかれ
鉛戯子およぶ。滑稽脂肪をよる妙作でござりますに
栗本某といふ詩人がみえて。鰌といふ字が有のふとてつも
ある土長なども字を書とて笑ことを。狂哥
師の五車亭が聞て。栗本ハ詩ハ上手かしらぬが土長の
字がナニあて字ナ物か。埃嚢抄ニ泥鰌一ニ土長ニ作る
とあるを知らぬとみえまするとて。亦復笑かへしてを
がありませぬから。めつたに利た風ハいはれませぬ。南山「イヤ泥鰌
の鑑板から。おふ諸子実が入てをりますでございます。一応摩「さやうく。
僕とんな話が長と。切落から平場をぶちこまれますから。先
誤字假名違の話も。是ぎり仕舞ニ致ませう

作者云此酒ハ酒泉の翁より
伝来の法をうけて造る
名酒なり毎年九月より製
造するゆゑに三都にひろむ
四方の酒家あまたありてその
美酒なるを知るべし
其甘味ハ外に類なし其銀線酒
下戸も上戸も飲て心よく

文盲散人題

酒

英斎老人

詠酒狂歌十五首　雷山人

扇橋文庫

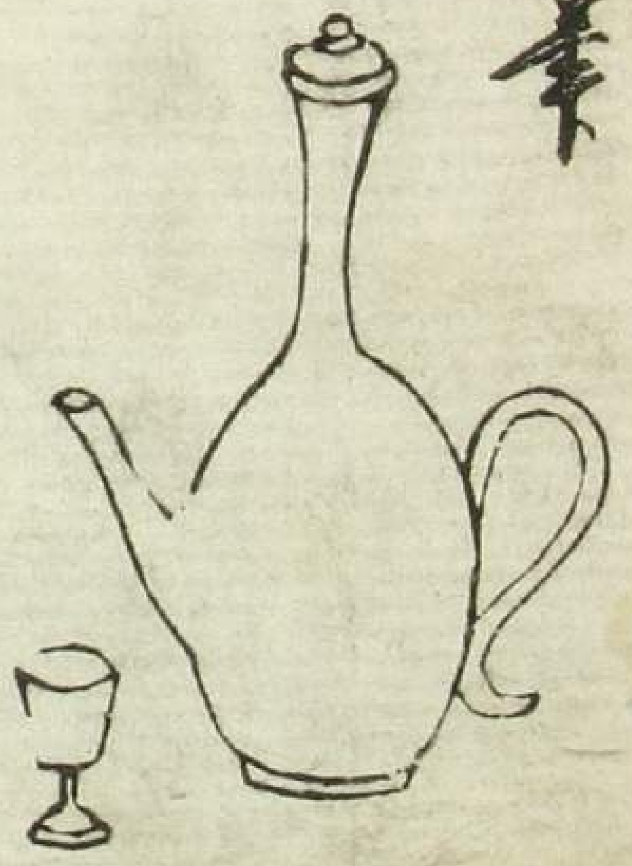
行舟よりかゝりとはけん跡ころハ池田いたミの酒の香かハ
世の塵をすゝぎ清めて清浄の酒ハ会れさん坊くの水
拵へむふにまちわ紀太おくらさきてつうもあがりさけの入なう
生酔の夫婦けんくハかくらむり角を出しうう棒を出しうう
百薬の長とさる酒も程をしれ呑過しへ毒薬の基
呑すをさ倉縄とおもらへていきに浮世を渡りおもろさん
後の世ハ酒とかうすれて世の人をきらふも露も物とらもそてさん

降をきり雪ハ深くおくあがりくに酒ハつりりあみあ宿にかけ
老もせて香をや野辺の菊の酒世をのなかしふれてまへ居る人
世の中よ酒と女はなうてまへ生きてもそとて居るもなし
盤石の人も動かする酒ハちから我つよ紀ものなり
春ハ花秋ハ紅葉と月雪になくてなるまいもの三味線と酒
山中になくてあらんとはかりひきもや命なりけりあかりのさけ
何もかもみなあらいかくもあらぬ酒酔ふたあかりハ気ハいらん
米の花香はしてなら〳〵の池と清き紀折もさかく

与比一壺酒
此於物化物
曳卻何處去
り作陵以及

蓬屋主人

白棠書



百禮之會非酒
不行

廣眠慎

勿言一樽酒
明日難重朋

雲岸伯盛

但得醉中趣
勿為醒者傳

雲侶潤人
之書

南陽老人

澤

又惟竹林賢者
壺觴中儒一生
須一著一斗待

百石庵
宏生

窗外西風雪擁爐寫
酒缸卯妙鈞船西蓬
底曉鯨江

柳之石

手まかせ　書之ま　光堂
うれしさやまの　おそひ　まつかさ　ある　宿　酒好
李太白一合飲んで
一首賦し　萬漢
あまりの量より飲む第
宮中一室に記さるゝなり　玉秋
ふつと来て猿の盃に酒を初穂　石二云

昨日醺醺今日醺　世間争有我
醒神　三杯沃盡百憂去　唯有
蘇齋一夜春　竹栖外史
ほろゑひもよしはさき梅
まけてもよし酒　岳亭

飲酒何嘉多醺
酣以為期不辞亦
不亂三危或五危
録陶白河詩　東堂

それよりも
杉の酒屋へ
初めり
萬溪

世の塵のちりひきはらふ玉箒
酒はまさる楽しみの紀
楊逸史

既酔念君醒遠
餉為我已絣開
香浮罍盞凸光
照牕
龍峯

和異倭夷天皇

あふけるそ あふきて なかめし 杉のさかえも かゆきその

霞のあし たらの国

東天紅盃金雞

一壽斎芳春画

香宮谷姫

今さらに 雲の上筆 むき出して 月のさかつきの かまくらうき

唐衣橘洲

酒計土里之翁

ゆきこのけの強健と人の 比は老の命もあるかなかりん

朱樂菅江

桃燈屋忠七

あく波のきはのさかりて人中も
とけめくるはの末の松山

米人

静間花九郎

情ありふるとあひしらぬ
をなりしい

萬の綺の
こゝろみなのかう

蜀山人

手挑屋舟六

夫ふあるの比翼の

あら七夕の
あさぢ屋
とも
あるが
なりなん

蜀山人

踊客雀八

窓の錦
かさし
そゆる
一雅の万傳れ
あるつるかひ
長根

思ふても山家の猿の

尾師 鬼丘郎

三陀羅

錢金の内侍

外面ハ河豚のごとくなれども吉兆膳を人にすゝむるまゝよ内心ハ菩薩のごとくなれどもかねといふてくどく人なしにほまちらゝてもめしなりけるなもてくだくれやその身に米ぶりまる稿

六樹園
飯盛

走女於味噌

噴て歯をむき出せバ鬼かとおそれ笑て口をむすべバ人をとろかす頬ハ萩餅のごとく鼻ハ洲濱に似たり悋氣より喰けにかゝらんや一寸むと口あけて見る人笹のさきなうへなかをいれても笑顔のあいくるしきけめ讃

平亭銀雞

天行醫師
窮理堂主人早速全快

大黄ハ閻魔の質汗とこゝろ附子ハ侍の白骨あるとおのづから藪醫のあらじ

勝負のこの世の志まぬのみなれば世上におきものハ警めどの

好事亭題

酒取物語上之巻

江戸前 延酔客 平亭銀雞戯述

今はむかし酒取の翁といふものありけり翁のゆゑんハとしのみな生酒を飲てもからたのしみハ近国のさけハあまさずつよくして玉川ハうちきまりて中くそのあぢハ山家にかぎらず白酒のさかなもとしかやなきさかなもなしあきのうまへちろい鉄砲するなどの九年酒もちらうあるハ中だしにその名きこえしをはるる伊勢や川でんや山十きし田ふいつるまでおのとおうゆる酒屋の名ハ所にも見とるものハかならず酒飲なりてすぐに生まれにきざあるれ

早稲田大學圖書

いづくより来りし酒もりつくふ
かなひとかぎそて汁酒ハ
一日の慰ひとこゝちでれハ二百の
慰ひとあさゆへしものどかぎさるゝ一をと
慰てなぶ
るゝあけ
まべく悪いふとも多く酒とどうて妙あり
とて酒もりのかきあると

いなかのせり
ある時翁田舎
うら下とくらの
さけを
あらひけれバ
まづかなひ
とうきやうぐ
慰ひの日かぶんを
うかう
ゑんとそ

すにこころなくさとりのせんとぬきたるにその口よりかくやくたるひか
りともなち湯の中ひふんぷんとして一ッ宝となる。おくさに落合（?）
に入たるがごとし。おきな大いにおどろきさとりの中をのぞき見るに
人の姿をなしたるものちいさきをぬべ。いよいよふしんをなしびが法利
とるとく打ちよりみるにたけ三寸ばかりなる女の子をも
うつくしきかおきなをみつけてにこにことしてねむる。翁いよいよふしぎに
おもひしが大いによろこび。これまさしく此年まで子といふものなき
ゆゑ天帝よりさづけ給ふところなりとはじめのふしんもどこへか
それゆき。ゆゑにかのものが迚ざんといふ。しかしてそのかぐやのやさしければ
こまれ入てこしなひたるさて名をなほとはけんとていろいろかんがへけるが

かのものがちゑをもかよびがたくいひけれ廿八とかのひめるところにある人
のいへるにそこに鶴峯先生と國学者あるが。その人にたのみて名
をつけてもらひたまへとて（?）たづねゆきければそのときいそうだが
のなかよりはじめたる先生いさいとききていひけるがそれへのつきまで
みほし酒のむかひをかぎてまうけし男子もあれどもなよたけかぐや
姫と名づけたまへ。姫は女のつきなるよしをさとしければ
おきなたちめでたくよろこびてそれよりかぐやひめと名づけけるなど
の玉とめでそだてけるに。ちどたちまち大きくなり。三月ばかりの中に
人になりぬたけなるに月のめぐり年ごろにもなりてうつくしきいろかたち
さるべきかたちの…はせかいも類なくかかやきてあまたの

そとおりひめもおびとゞろくてみゆるむかし世界の男あてなるもいやし
きもいかでかぐやひめをえてしがなえてしがなとおとにきゝてめでゝ迷ふ
よきめ見るべきかしこき人はかぐやひめとなるべきものゝ世にてあらんかし
なかなかびぎんおよびのひなただんちかきのちかきひとびとかくべ女をいへば
かぐやひめとおもづきざあやうといへびひめといづれともおもはしげにかくもか
るに付けひめのうかさ世ぬ日はなかりけるとぞ
○かぐやかひめのきこえ高う世にもすぐれたるうつくしさなればなかなかにぞおよくのひとゞ
なんおびたゞしまたは世にいふこのころといはるゝ五人の男鬼の亦舟云
忠七雀八花の亦はくて世の中の女にこゝろをしめてもよしときゝけが遠
路もいとはずくびぬかでかえのひゞかぐや姫のひなたずねんと

それらはこれまでもしかのひつけおのがひにたえかねておかさねの家に行て
たゞずみいたれどかひなくもおのゝびがさとおとゞきつかれはじ今は世にまさる
なかにも在はある時おかさねをよびいだしむきあひとこれにくどゝとあはせ
ふかきおかやさなしおかさくどけと翁もつかうまつるはなかりてあちゆ
ますますきびしとてとゞまりいひて月日をおくるかくもつてのうへみ家にかくてよめ
おのひ禰にいのり佛にねがひおのひとめむかしきこえもなしおかさねてのとて
つきえをおくりまた紅かぐや姫にいはそう。おん身は仏の化身の人かとやまかうた
世のしんまゐるまでにそびそびあげつゝおさなきがんさしかりきいはるゝ
うたでされいまはかぐやの事くちまひてんやといへばかぐや姫はのちとそのう
まいらするいかでかそとおりけてまつらざらんや。すゝけさんの身なりともこれら

ここにまたのおやびとくそかのひとをまつまゐらせといふ翁これをきゝて大によろ
こびことし年七十にあまれりあすをもしれぬ身なりつら〳〵世の人
男は女にあふとんすとおもひ女は男にあふとんすとおのが一門繁昌のつねなり
しかるにおんみがさまでさとめてむこをとらんつまに世にいひいなめのいく
ひんといふなもしらばかりで銭ほどろうちにもあるねがひがあらばかまへの世代
とぞとこたへいふておきしはおん身もしりつらんがそのうちに五人のひとぐみは
ざしいとしんせつにしてことわるをも身にうけ世ほどとまりてきをといふも
おん身にこゝろざしがあるべきなりおん身あやにつかるのきさきまでなれば
かの五人のうちおん身がこゝろにかなひし男をむこにさだめてこがむと思ふゆゑ
なまつきかしとあきくなのかうにくりかへせばかぐや姫はしたしくとしもなかりしが

やうくとかほをあげさるでのおほせいかでかそむきたてまつらんされながら
この身もひとつのねがひあり其のぞむところの一人をむことさだめ
やくそくれがその五人のひとぐがかねてききおよびたまひつるそのよしあしを
たまひてこゝろざしのほどをためさんとてはからひやきさんといへば
おきなは大いによろこびて五人の者のきたるをまちゐたり○あるゆふぐれに
かの五人のひとぐくかうちそろふてかぐや姫をえらんとねがひさるいゑ
びよふにまいりてこゝろざしのうちきかしいそこにあるうえさがりぶんであんない
かどうぶし翁ひくよろこびつゝ翁が門にちかづきしかば酒をいださせて
これつくおもてなしにえいで今日はおのおのおたづねくださるありがたう
はかしとらひへかぐやひめのことおのおのにあんじめ一つのらうやきさんとのてずあり

とぞかくてのちらくみひきあけてかぐや姫にひきあはせ給ひければおのおの今さら
おどろきてかぐや姫をおがみこれこそ天人のあまくだりしものなれとおどろき
やひめは諸人とよろこびていひけるはそのときはかならずかなふぬしのこころへとふかく
おのひとつのけるさてそれより五人の方のうちより男ののぞむ事を
打きかせりとてまづひとりにむこときめておがめごさつねにじつきたてまつ
らんまづ石作皇子といふはかくろむつかしきたからもあらばとその他の
ひら宝をとりて。まづ鬼の角ぬしは大江山へいくつ。若狭と海へどうじ
が酒のみたる大さかづきをおきたまへ又舟出ぬしはむかし
うさぎとたぬきがあそびける土舟とおきたまへ又忠七ぬしはねづ
そのちうとのせうりおのひつきしねづみのよめいりの道具を持来り

たまへ又桜八ぬしは花さきぢぢのとなりのあるきざさのつづらをおきたまへ
る時へおまる鬼の角ぬしは花咲ぢぢがたくはへし一粒をめもちきたりたまへおのく
子供にとたずねておきくれしぬしはコトラへもつてふたりのしなぞまつらんや
ゆめいままうすほどにいひければ五人のひとびとめいめい思を起して
たびにわざとこれをさせてさてむつかしきのぞみなりとてこれを
ごくの事ならぬむつかしうぞのつびそれ[illegible]
[illegible]鬼の角のをふたつ[illegible]
よもふけるゆゑをつけておのがすまゐへかへりける
○ほども鬼の角ぬしは家へかへりかぐや姫のおもかげとうかんで[illegible]
四人はどうともあきれおほせたのまれし前書筆記

ふも見ゆる大江山のと
あまた酒てんどう
じのさかづき
なづけしぞさて
わくへきさうと
めしもちだ
ちやものまで
一日一杯えぐ

けるがふとおもひつきさかい丁中村座
のまききやうげん酒てんどうじの
さかづきとかうけんとしやうひき
からげいしやをさして
いまだめぐてそわかし
ちゝもそれ
より鬼の女
さかづきおいとう
大さかづきとかうけ
あふわちひえんゆでぞのわし
一本とめ一ツそくの人五寸あまりも手に

門口よりふさくしてまゐり
さぐふ翁がいふには

せうくのなかでひめのみぐさの子とおちきてまりがよく悪人におさ
せてくださいといふことをきくようかぐやひめひとまとりでそれとつたへるよう
鬼が崩れがおとりふ死をつき流さぞく　おんなのきれ子とえんとぞで
でいのちもさらすだろうてびく　鬼ともおや江山いくの底のとおく
しておやくたびい命ぞりしありてをみさまへといひあがりふろしきばく
よりせ金出をとつきてかぐやひめてことゆうある手をいだしてこれをとり
あげさぞく大いあるさゝづきみなよくもおん手にへしありござらべこれをで
ふる盃のかこめいてまゐしといへば鬼が崩れ大いによろこび悲で中かへあと
ばふのりてさいふものどもかどとらいこうが酒ゆりの世う金のさせしさうに
われはそまてりつぞふのできたりしとかのたこのおしと桃をいだしけるが

翁そむようてきゝてさつくさかづきにぬちのさすかみのかおりとらへが
いやとよさふあそびむじよう今までおまへの年月と経きたがかくち
いさくなるへ里のうせんなりてまれらいなうにきかめし人げんのみで
とめなうぞわうぞどの中にありて腰ハ桃の中にこもりどこれ
こなみいんさうつうのいやといわれぬつけありとひとつむせうにおやべりゐる
○かぐやひめハ鬼が崩がたまほしときてわたくしがあまりをりしくそろふ
まへ年て　おん身五いんさうつうのなすをとれぬすひかさもおそれど
頼光にまくわしめとりでありときじが腰ハ桃ありともおのうごき
どうあたこのわしかりだとへいくたくの世さうと経てまいるとて足を
めてうでとおこんどくじぞゑくるでごさのうぞといふところにのりさき

づきしゆゑ
みなの世の
とりひくまふ
ものなるへ
それハそか
きずつきと
ゆのさかれ
とせんとて
鬼の前か
ま人悪大王さ

㊁うけらくびきやいかゞハせんとおのひしふぽや あまま
できしとくてあらくとつれなきやなでおどろきぽれ
まわりのまわらぬうちのそなさんとかの盃をとり上て
ぐつとのめど大さかづきの なかなればひと引ふハのそ
かく ぽとふあちてあるうちさやまめとへおあり
けがまやりなきべるあむさんかうといふまぐれぱひと
いきふぐつとのんでむねあせおかしぽかぐや姫ふさし
けきぺひめもさかれとうけてのまんとせしふあへ
いかまさなばきのうぞづろくとをあまと酒ハ一さもの
たのこでもくいとぞとようのれなきんぺでまそ

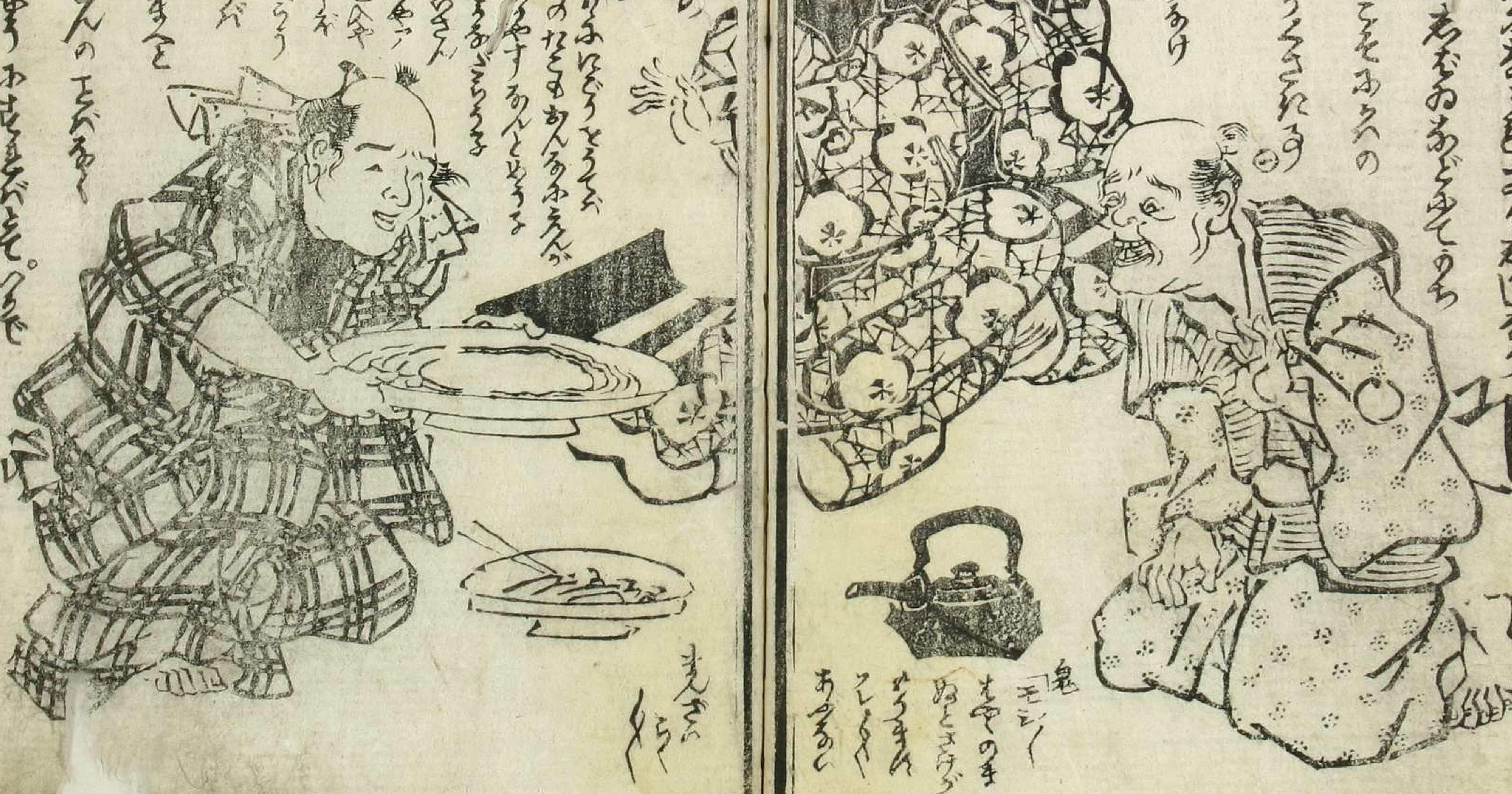
あかしなきべ
鬼みつそう
あん汗を
あじんの
うちふあのひ
なるればさら
づきハそうと
みてこしいし
かのあるふいそ
これふさけと㊀

ハそのるおのわ前ハぞくうの
むろまざまるかどし かぐや姫ハあも
さうぐけきなくさかれとかゆあき
鬼の前ふいびなるハ㊂
あうぬいもせ
の さかづきハぽぐめらにしとてそそきて
しふで見ハ酒さえあつてさかづきのせうゆでちがさし

さまざまん身と手ぬ形にあるゆゑござるあり
さうもるところ此里ハあなたあとゆきてのち
ゆるりともあらんぱさまざまこそにおくのの
ふあひさまとうゞちのつくさるゝす

姫「私のさうづきやしもそこがあけ
まんやくふさちまさせね
まこのさうづきが
すゞまんとく

たとへんもののほしかるまゝ
とめてきて大江山の
さうぶあつをぱいかゝ
まうさまつとも
いゝでこちらへあき
むかまんやぱあん身を
まことのこゝろもちにあるが
鉄の印を持きくろうさまを
いひかるに鬼が身つゝじんのことにある
せんめんせうぶたとへいう身がわるさにべそぱいゝで



まことのさいくのさかたをゆるさむや。てんびくみな何とやらむりなのぞきいたし
今ひとらにかなくしてつるんとこびとかはりの家をさしてぞあつかふなる
○舟大工ハ齢ハなくて。むかし雅ようのごさかしたぬきの土舟をくはなりけり
なきともあるべきくらにあるじおまりだあくしれなりあるらぬ舟大工と名附き
べしとぞその家にいろつちふねのそうでんきたるに舟大工いひならハつち舟と
いふ土をもとふなりあり今が其のいわらハ云ふてこしらへる舟なりけり
家舟大工と七八代ぎもちときれどつちにてふねをつくりしそのあとしかもなき
くにぞそれ入ことをあるはあらそひとも有まじくあかしとばくさなし
又いかなるともにて土の舟をこのミまなり人はれのいらぬとぞかんぐら
とききよくに土舟のかやうなとのぞまれハさぞく世ハめの志れなひとも

あるかのなに土のちうなる灘倉におきどつちのふねといへまぐるきますへひと
ほなのさかりてあそらふれ舟大むつとせしが其人々となくば家とぞさいぞなる
○舟大工ちゃくらんがなへて其色兄どものみてる金貞綱とさそのへでむかしの
土舟なりとそめで雨くにきうじとむとさびあそのときふいろうかたうを
つくりてけるにぞうなうある家の あうれきぐぞれを買ふけさとくさるにぶら
ふて湯とうのうへにいさうざそくえびさわところの土舟をおちて のをまを
あそきことを大いに深ひろしといふもけふをおもろうへあらかなる人もなく又
こしらへるかたもほしいなハせんとあのひとところこびつとなうにやけどあるとす
まとろなるへあうたなるひとのいろらぞその舟のうちく山にゆきそのくぬく
まことをしくらたれぞうの山にかのむきしずけ山の主のりとやら出くさて

ねべゐくろがくしまづそのたつひ
といへるわすれ山ぢうぞうそん山を
ぬけ上の山とかえて
山下ゐいでろ山の
きふかゝり
あくどかみ
ふのかゞり
ちつの毛を
むしつて
山下ち门と

となりぬけびでたいふ
かうそを山の名を
くびうあるくのがくろふ
あて出やくの日をそ
たらくあふかゝ子
はなぢうし山の
ふのとあぜでのつち
ぶねどのとあ春れう
ごれよりくゐしくなる
やひめふをましく居へと

いへば翁ハきいてそれハ〳〵でかんしんのたのもしさ　みづからもてる法でんでい
姥ハまたさぞ〳〵よろこびたまへしといつまでおくの一トまの入へかくれける
翁「モシ〳〵そのあさぎさんでたのもしとばつさといふハそちやアなんにちでござる
舟「イヤそれハ翁のおたのミかふこのまゝまて
○かくてあるうちハ奥のひと間にいつてかくやひめにむかひて舟玄のめが
くろといふいきいふまほじおん身がのぞミのつちふねをもちきたりしよりそうば
なまたびめハふねをとろちまでひつたちいで舟玄にむかひおん身たるが
のきんちとこたへぐんあん〳〵してつち舟をかとあきたりしよう　まござる
んせつのゑどいとしかさおけなくこそぞんじまするいざ〳〵そのつち舟を
みせてたまへといへば舟玄たちまちかのきんぎよたちをつれやく〳〵
どろのどこそれハなんにのためきの舟にしつらへありあかくひと

どろりの舟ふなハてうにしさじひめがたくものぞミあらば翁へハいくたびも
うんぬん〳〵と志ののせんとくのるもふちこみきたるところなりあ
なにかゆゑとい奥さんへいへばひめさ聞これハさて〳〵ありがたいでござる
あかるべきならばふねをとゞめるせんどのかうへおん身ニそのふねを
さとはしてきたりまへつくりきてそのうちの舟ハきのふねたぬきのふねハつち
の舟ところでしもやきもちにつちのふねハ水中にてくずれたぬきハおぼれ死
せしときけりおん身のうれしさよそのせつハそのうへとともにそのまゝ死
ぬ舟くずれてくずれざるうちにむねをくずれはとてもおん身とハそれ
けふこのせつにこそもとよりおん身をさくらへかれどもおきなく
いざしたまへザア〳〵はやくとせきたてらるゝ舟玄おわきふたあい

さて〳〵これハむつかしい
おれが手にハおへぬ
さあ〳〵おきさん
毛虫の事でおまへ
の手ふも[illegible]
とえくり
いそがへ
けんぐの弟へ
のらせべきやとのぺ〳〵

姫「すやし これがこれぬ
ききのつきさく
ふるでうぶらのま
すりみよし わ
まれをへえまあ
あのふらききの
あでてきくへ
ゆく

兵六「なめきの[illegible]
むさしくうえて
まつこのふねへ
ときうけてへふとし
らへおきし よし
うけく
まして

きいていやとよ。さてはおかしい
まづこのふねをはなれましよ
なまくぶ子は[illegible]わかれ
のらせるお母がありと
いふお舟あせんをさく
かの子やと[illegible]ふねもちいで
せんきのふうくぜんとおもく
水上ふの世まとおもうてが
ふんどしとおとしてきづそそふ
きづきをくべこれをとりて かゞみ姫

さてこそコロリさまのうまうにさゝらがはやくめさきのおしらちふきあれあ
らざるべし。その弟子がるいなうちろそろ唄にあはざれば忠臣の
芸がねの妙作あまつちにねまきりのあまさきてもいよいよたうかといふ斎藤が
由なぞもとこのむしあり君ろふかる小竹のを持寄りてまはりあふあやしや
是ゑおきて手以外おろごろだし児どものお猿びのふみめぐるあどをもてる衆
るてぽんくらうきらいふを世みてあきあつる家あるべしとさとしもたがらべほし
とさゝま舟古せたれめん。ところ一ぱんけくろうよりしまこくふうとゆえて
まんでもうでもこのひめをくどれおとまでおくべきうと。むかふおのへどなみ
あんゆゆくるあうんなゆうのうろう
酒一取物一つくり上之終